



平成 28 年 8 月 10 日 (水) 定例会発表要旨

関寛斎と樽川農場

前田在住 濱埜 静子会員



関寛斎、現千葉県東金市の農家に生まれる、13歳で儒学者関素寿の養子になる。佐倉順天堂でオランダ医学を学び、銚子で開業したのち長崎で一年間ポンペに師事。33歳で阿波徳島の蜂須賀藩主斎裕の御殿医となり、明治元年の戊辰戦争で敵、味方関係なく世話をして活躍した。明治6年、士族の身分を捨て徳島で開業。貧しい人への無料診療などを行い住民から敬われるが72歳で北海道移住を目指す。

山鼻に移住した寛斎

1892 (明治 25) 年、四男又一 (16 歳) を札幌農学校に入学させた。又一は石狩郡樽川に 32 万 4 千坪 (108 畝) の土地貸付を受ける。又一、1902 (明治 35) 年札幌農学校卒業、卒業論文「十勝国牧場設計」(陸別原野一帯の気象条件などを科学的に精査) を発表、卒業すると陸別の土地貸付(1377 畝) を受け陸別に入植。1901 (明治 34) 年頃より樽川の関農場は順次、小作人に任せる。

樽川農場の 1906 (明治 39) 年の地図、1932 (昭和 7) 年地図、現在の地図がある。樽川の関又一による土地の払い下げは、1892 (明治 25) 年制定の「予定存置法」による団体移民入植で一戸あたり 15,000 坪 (5 畝) 3 年以内成懇すると無償付与となる制度で又一は 32 万 4 千坪 (108 畝) の土地貸付を受け、1900 (明治 33) 年成功付与されている。又一貸付地には 1894 (明治 27) 年 8 戸、1899 (明治 32) 年 23 戸が入植している。

明治 39 年の地図から 樽川の又一貸付地

道立文書館に行き関又一の地図台帳を調べ、地図目録を作成して整理、(この部分は開拓の村のボランティアの方に協力して頂きました。) この目録は文書館所蔵の「石狩郡樽川村売り払実測図自 1 至 427」によるものである。原紙の関又一への「付与日」はすべて「明治 33 年 7 月 7 日」である。となっているが目録の表は省く。



明治 39 年の樽川農場

地図目録と地積を明治 39 年の地図に載せて見るが図面が合わない、石狩状況報文には湿地帯のため小作人の出入りが多かったと書かれているので合わないのか。

次に 1906（明治 39）年、又一の土地の地図は、1932（昭和 7）年には極東農場になり、その後、明治乳業へと移っている。寛斎の指示により、明治 34 年頃より土地の整理が行われていると記録されているが又一の土地はいつ、誰に名義変更がされたのか不明である。情報によると 1945（昭和 20）年の空爆によって役場が被災、資料など焼失したと知りここが重要な部分になると思いますが今は知ることが出来ない。現在の樽川は石狩新港になり住宅地としても発展をしている。

山鼻から陸別へ

寛斎は 72 歳で十勝国本別村斗満（現十勝管内陸別町斗満）に入植し、大牧場を開き自作農創設に力を入れる。また札幌農学校で学んだアメリカ式大牧場を目指す又一との間で意見の相違が起きた。経営の悪化、一族間の財産争いも起き、寛斎 83 歳、服毒死する。その 9 年後又一は農場を解放して東京に移る。

8月10日定例会「平佐伸二会員のメモ」を紹介します

手稲本町在住 平佐 伸二会員

- ◎ 安政年間の在住制度について
- ◎ 片倉家臣団の移住について
- ◎ 手稲三村時代について

せっかくお話しいただいた講話ですが、内容が豊富で多岐にわたり、聞き取りがたい部分が多く、うまくまとめることが出来ませんでした。そこで、講師の気持ちを押し量り勝手ながら下記のようにまとめてみました。



上手稲の先達者たち

和人の入地以前から、琴似発寒川から手稲山の麓にかけての地域は、アイヌ民族が生活を営み、独自の文化を築いていたといえます。

安政 4(1857)年、山岡清次郎・大竹慎次郎・永田休蔵ら幕府旗本の武士 20 人とその従者たちが辺境の警備と開墾のため手稲村(発寒地域)に移住しましたが、一村を形成するに至りませんでした。しかし、開墾に従事したことでやがて屯田兵制度の基礎となっていきます。

戊辰戦争から北海道移住へ

慶応 4 (1868)年戊辰戦争が起こり、旧幕府軍(榎本武揚ら)は五稜郭に入るも翌年明治 2 (1869)年 5 月 18 日政府軍に降伏。仙台藩白石城主片倉小十郎邦憲の元家臣団は敗戦後、他藩にも増して過酷な仕打ちを受けている。1 万 8 千石が 6 5 石に減封され、1,400 戸 7,500 人の家臣を抱えた城主片倉小十郎は帰農か移住かを迫られますが一部の家臣たちは北海道への移住を選びました。最初の移住先は胆振国幌別（現登別市幌別）と室蘭市鷺別でした。

が、片倉家の家老職であった佐藤考郷と三木勉ら 604 人は開拓貫族(かんぞく)の編入を願い出て認められ、幌別ではなく札幌を目指して(政府の方針変更により)宮城県松島から咸臨丸(カンリン丸、佐藤考郷)と庚午丸(コウゴ丸、三木勉)の二隻は別々に函館港経由で小樽に向かう途中、咸臨丸が座礁沈没、苦難の末庚午丸で小樽に上陸し石狩に向かいました。

明治4(1871)年10月に石狩に入った翌11月、佐藤考郷をリーダーとする一行は望月寒(白石村)に入植しますが、残留組の三木勉をリーダーとする一行は翌年3月、武士たち47戸241人が発寒村(後に手稲村に改称)に入植しました。歴史上はこの片倉家臣団(リーダー三木勉)の移住をもって手稲村の始まりといわれています。

時習館創設

開拓功労者の一人三木勉は「開拓の基礎は教育にあり」として移住早々、子弟たちに「読・書・算」を教えました。このとき札幌には三つの学校がありました。明治4年創立の「資生館小学校」、明治5年3月創立の善俗堂(現白石小学校)、同年5月創立の時習館(手稲東小学校)で「学ンデ時ニコレヲ習フ」を引用して時習館と命名した三木勉は後に開拓史戸籍係りを経て豊平村戸長、千歳村戸長を歴任したあと北海道を去っています。

手稲村は明治7年に上手稲と下手稲に分村。明治8年、琴似屯田兵村が開村され、明治13年には上手稲村、下手稲村、山口村の三村体制がとられています。

稲作づくり成功

明治10年に白井恒路が上手稲村で稲作に成功し広島県や山口県、福井県などから、政府の援助に頼らない自移民で入植し開墾を始めました。この地域(現在の西野・平和・福井)は石が多く大変な難工事の末「広島開墾用水」を完成させて、見渡す限りの水田地帯へと生まれ変わったといえます。ここで作られた「西野米」は札幌でも有数の米どころとして知られることとなり、米作りの最盛期だった昭和初期には百台もの「もみすり水車」が(コットン、コットン)と音を立てながら回っていたといえます。

(文責:佐々木)

参考資料 : 区制30周年記念(札幌市西区)わたしたちのまち「西区」・手稲郷土史研究会発足10周年記念誌(掘り伝える)

次回の予定

10月12日(水)
◎手稲区の道路の歴史
立花邦雄会員
会場:区民センター3F

平成28年度手稲郷土史研究会研修旅行の企画紹介

10月19日(水) 8:45

手稲区役所→苫小牧勇武津資料館→二風谷アイヌ文化博物館
→神田日勝記念美術館→本別温泉(宿泊)。

10月20日(木) 8:00

本別町ホテル→陸別関寛齋資料館→帯広百年念館→手稲区役所(16:30)